名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第24巻　第2号　pp. iii-v

清水先生との出会いと思い出

八　亀　五三男

私が京都大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程に入学した時，一人の男性にお会い致しました。それ以来，私の人生・研究に大きく関わりを持たれた方です。

大学院生の時「音声学」の授業を履修しましたが，その担当教員が清水克正先生でした。特にヨーロッパ諸言語の歴史的な言語現象に興味を持っていましたので，音声学といっても各音声の調音方法を知っていれば，通時的な言語変化を理解するには十分でした。音声学といえば，調音音声学だったのです。しかし，清水先生の授業では，さらにもう二つ加わりました。音響音声学と聴覚音声学です。現在私が担当している「ことばと論理」の授業1回目「ことばの研究分野」で，最初に必ずarticulatory phonetics, acoustic phonetics, auditory phoneticsについて説明するのは，先生の「音声学」の授業風景が脳裏から離れないからです。

2012年1月20日の，名古屋学院大学における最終講義「英語音声学研究と教育を顧みて」において，清水先生は

> 「音声研究の主要な役割は，諸言語における音声の記述であり，大きく三つの領域に分けられ，それらは音声の発生を調べる調音音声学，音声の物理的な特徴を解明する音響音声学および音声の聴覚部分を取り扱う聴覚音声学に分けられる」

と明確に述べておられます。すなわち，若い時から現在に至るまで，それまでの調音音声学に加えて，さらに音響的，聴覚的研究の重要性を十二分に認識され，多くの研究業績を残してこられました。それが先生の御研究の中核を成しています。さらに，清水先生は生成音韻論に御造詣が深く，篠崎書林から『生成音韻論概説』を上梓されています。先生の「音声学」の授業に出席していなければ，私の自宅の本棚にSanford A. Schane. *Generative Phonology*（1973）が並ぶことはありませんでした。

清水先生とは，「教師」と「学生」以外に，「学生」と「学生」という関係も持たせて頂きました。大学院入学当初，西田龍雄先生が「言語学講読」の授業でP. A. M. Seuren. *Operators and Nucleus —A Contribution to the Theory of Grammar*（1969）をテキストとしてお使いになったことがあります。西田先生は教壇の所にお座りになり，学生はコの字型に着席します。私は廊下側の席におりましたが，正面窓側右斜めにいつもネクタイを締めたスーツ姿の男性が座っておられるのです。我々院生はラフな格好なのに，お一人だけ正装なのです。その当時言語学研究室のお世話をして下さっていた庄垣内正弘先生に「あの方はどなたですか」とお聞きしたのを覚えています。それ

が，名古屋学院大学の清水克正先生でした。私が最初に先生を意識した時です。

その後，私は北欧文献学の研究を進めるために，コペンハーゲン大学に留学致しました。ちょうど1年経った1979年は，コペンハーゲン大学創立500年祭で市内は何ヶ月も前から色々なイベントでお祭り騒ぎでした。大学も種々の学会，講演会などを企画し，例えば，言語学関係では「ラスク＝イェルムスレウ類型論シンポジウム」，私のいた研究所は「北欧文献学」関係の講演・研究発表会を主催致しました。またRoman Jakobsonがコペンハーゲン大学名誉博士号授与のため招待されていました。そして，音声学関係では「国際音声学会」が開催されました。

ある日研究所から学生寮に帰るため大学の正面玄関を出たところ，三十メートルほど前方から何か懐かしい雰囲気を持った人物が歩いてくるではありませんか。1年間毎日コーカソイドとしか付き合ってきませんでしたが，正に動物的直感でしょうか，前方から歩いてくる人はモンゴロイドだと瞬時にわかりました。清水先生でした。この「国際音声学会」出席のため，コペンハーゲンに来ておられたのです。もし少しでもタイミングがずれていれば，この偶然は生まれませんでした。非常に稀有な経験をさせて頂きました。しかし，この「瞬間的判断」ができたのはなぜか，今でも謎です。身長，体格，歩き方，雰囲気などで判断できたのでしょうか。

帰国後横須賀の前任校で教鞭をとっている時，1989年に外国語学部ができるからとお声を掛けて頂いたのが，名古屋学院大学にお世話になるきっかけでした。大学院時代は「学生と学生」の関係，「教師と学生」の関係でお付き合いをさせて頂きましたが，名古屋学院大学では同じ教師仲間（「教師と教師」）として一緒に仕事をさせて頂くことになりました。三種類の関係を全て経験できるとは何と幸運なことでしょうか，奇跡に近いかもしれません。

清水先生は長年にわたり精力的に音声学に関する研究を続けてこられ，「主要業績目録」にありますように多数の著書，論文を著されました。また，(国際)学会では積極的に研究発表をされ，日本言語学会，日本音声学会などでも長年にわたり要職をお務めになりました。アジア諸言語の音声学的分析も研究範囲内に入れられ，その分野での研究，論文発表もますます盛んに行われております。学内の行政については，外国語学部創設，大学院外国語学研究科創設・外国語学部国際文化協力学科開設などに御尽力され，また外国語学部長，大学院外国語学研究科長，入学センター長，国際センター長などの要職を歴任されましたが，その数は枚挙に遑がありません。外国語学部をお作り下さったからこそ，われわれは研究を続けることができるのであり，清水先生には心より感謝致しております。

北欧デンマークは小国ながら多くの言語学者を輩出して来ました。名古屋学院大学にお世話になってある時清水先生に，イェルムスレウの弟子でもあり音声学研究で世界的に著名なEli Fischer-Jørgensen女史のお話をしたところ，先生はいともさり気無く「日本で彼女を案内したことがあるよ」と仰いました。私には「まさか！」の驚きでした。そのすぐれた著書などによっていつも啓発を受けている学者とも親交がおありなのかと非常に羨ましく思ったことがございます。清水先生は日本を代表する音声学者・言語学者として，日本国内のみならず，海外にも多くの知人，研究仲間を持っておられるのがわれわれ後輩の誇りでございます。

長きにわたり心よりお付き合いを頂き誠にありがとう存じました。深く御礼申し上げます。今後は，御自身のご健康に十分留意され，永らく健やかに日々過ごされることを，同じ言語学科後輩の外国語学部今仁生美教授とともに，切にお祈り申し上げます。